なかった.

〔症例2〕65歳男性. ラーメンを飲み込む際に義歯を誤飲した. 内視鏡的処置は不可能であったが, 頸部食道にとどまる義歯による愁訴は軽度であり, かつ病院休診日のため入院後2日目に外科的摘出術を行った. すると, 義歯の金具部分が食道壁を貫通していたが, 幸運にも周囲の臓器損傷はなかった. 術後縫合不全は認めなかった. 有鉤義歯誤飲の際は, 金具部分が食道壁を貫通する危険性が高いため, 内視鏡的処置が不可能な場合は緊急で外科的摘出術を行うべきであると思われた.

8　当院における絞扼性腸閉塞症の検討

羽入　隆晃・若桑　隆二・植木　匡
石塚　大・生天目信之
刈羽郡総合病院外科

【目的・対象】開腹術後の絞扼性腸閉塞症の23例を集計し検討した.

【結果】平均年齢は69.6歳（41～93歳), 男：女は14：9例であった. 腸切除を要したのは17例（74％）であった. 原因となる手術は, 胃7例, 下部腸管7例, 婦人科手術3例, 虫垂2例, 食道1例, 胆嚢1例, 不明2例であった. 腸管の癒着部位は, 創部7例, 腸管7例, 腸間膜・後腹膜7例, 女性器2例であった. 原因となる部位と手術の関係は, 創部が, 胃3例, 食道, 下部腸管, 虫垂, 婦人科各々1例であった. 腸間膜・後腹膜は下部腸管4例, 胃2例, 婦人科1例であった. 絞扼の機転は癒着が12例, band状索状物が9例, 内ヘルニアおよび不明が1例ずつであった.

【結論】絞扼の原因として, 上腹部手術では創部が, 下腹部手術では腸間膜・後腹膜の癒着が多く認められた.

9　胃癌に対する膵頭十二指腸切除術の検討

河内　保之・清水　武昭・新国　恵也
西村　淳・清水　孝王・牧野　成人
厚生連長岡中央綜合病院外科

胃下部進行癌に対して, 腫瘍の膵への直接浸潤やリンパ節転移のために, 膵頭十二指腸切除術が必要となることがある. 当院では過去15年間に14例に膵頭十二指腸切除術を施行した. 無再発生存は4例, 原病死9例, 他病死1例で5年生存は2例, 累積5年生存率は37.5％であった. これらの症例に関して文献的考察を加えて検討したので報告する.

10　横隔膜弛緩症の2例

佐藤佳奈子・近藤　公男・大澤　義弘
太田西ノ内病院小児外科

最近当科で経験した横隔膜弛緩症の2例を報告する.

〔症例1〕生後0日, 男児. 左横隔膜ヘルニアの出生前診断あり. Stabilization後, 日齢3に開腹術施行, 横隔膜弛緩症と診断, 縫縮術を行った. 術後経過は良好.

〔症例2〕在胎38週4日, 2742g, APGAR 8/9点, 帝切で出生の男児. 妊娠経過に異常なし. 出生直後より多呼吸あり, 胸部X線で右横隔膜ヘルニアを疑われ日齢0に当院NICU入院. 入院時, 軽度の多呼吸あり. 胸部X線では右横隔膜の4-5肋間まで挙上と縦隔の軽度左方偏位を認めた. 以上より右横隔膜弛緩症と診断し, 保存的に経過観察とした. その後も経過良好で, 現在外来経過観察中である.

【考察】出生前診断の有無で治療方針が異なった横隔膜弛緩症の2例を経験した. 本症の診断・治療時期などにつき文献的に考察する.

11　当科における急性虫垂炎症例の検討

渡邉　真実・三科　武*・鈴木　聡*
二瓶　幸栄*
鶴岡市立荘内病院小児外科
同　外科*

平成7年から平成16年の10年間における当科への急性虫垂炎症例の入院は, 371例で, このうち36％にあたる135例に手術を施行した. 年々手術数は少なくなっている傾向にある. 発症から